

オープン カレッジ

能登半島地震から2カ月以上が経過したが、まだまだ多くの方が避難所に避難され、不自由な暮らしを余儀なくされている。

過去の震災から次のことがデータとして示されている。1995年の「阪神・淡路大震災」で、災害時に最も被害を受けるのが、災害時要援護者（高齢者、障害者ら）だと明確になった。2011年の「東日本大震災」でも、津波などによる直接死は1万5千人超、避難所や仮設住宅の中での死者（災害関連死）が3千人

災害時におけるソーシャルワーカーの役割

難所生活の肉体・精神的な疲労（47%）、避難所への移動による疲労（37%）、「病院の機能停止による既往症の悪化」（24%）であった。

また、「東日本大震災」では、6割の高齢者や障害者らが避難所に避難していなかったことがわかった。その理由として「周囲の支援がなく、避難することができなかった」（32%）、「身体が不自由で避難できなかった」（8%）が挙げられ、「避難できずに被災した自宅での生活を余儀なくされた」という記録が残されている。

さらに被災後、「認知症」「アルコール依存症」「うつ傾向」など、医療・保健

危機的状況で注目され始めたのが、さまざまな場面で活躍するソーシャルワーカー（以下SW）である。

SWは「人間の尊厳」を価値基準とし、それが阻害される状況にある時は、真つ向から立ち向かう。特に災害時は自助による生命保持や生活再建が求められる中、見過ごされがちな要援護者の存在を顕在化し、人間としての尊厳を強く訴えかけていかねばならない。

以上となった。避難所や仮設住宅に移ってから亡くなった方の9割が66歳以上の高齢者で、死亡原因は「避



日本福祉大学社会学部
教授・学長補佐
野尻 紀恵

「暮らし」視野に 入れた支援を

・福祉の支援を必要とする人の増加も明らかになった。宮城県では、アルコール依存症と診断された患者数が震災前の年平均を上回り、特に津波被害の大きかった気仙沼、石巻地域などで増加傾向が目立ったという報告がある。

被災時、状況の急激な変化によって、人々は極限状態におかれ、困難を強いられ、さまざまな症状が表出し、いのちや暮らしの危険にさらされる。このような

③できるだけ早期に日常生活に戻す視点④さまざまなものをつなぐ（連携・協働）視点⑤当事者本人への働きかけの視点。

災害が起こったその瞬間から、「助かっていたいのちを生かす」被災後の「暮らし」が始まる。少しでも快適な「暮らし」、生きているからこそ意味ある「暮らし」を守り通すことが、災害時のSWの役割として一層期待されている。

のじり・きえ スクールソーシャルワーカー、教育福祉。大阪府立大学大学院人間社会学研究科単位取得満期退学。博士（社会福祉学）。社会福祉士。1964年生まれ。